

骨董集

卷之四

1545
4



古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏

按此画は今より約百八十年
 前曾永中より作れる
 後より改を白紙布を
 したるものあり
 七十一番職人尽みの
 後を合せるべし



骨董上編下之後

あるべ

漢土は五月五日艾をちひさき虎をけくまを改めくまをありそれと艾虎と
 漢籍よありんたり和漢相似たるあり

端午の頭巾袈裟小人形

今より九百二十三年前延宝天和貞享元祿の比は五月五日男児紙を造れる

頭巾袈裟を着山伏の体に出きておび一奉ありき日次紀事 延宝 五月

五月の條よ云「以柳木作大小刀是謂菖蒲刀男児横之」

於腰著頭巾倣山伏躰云云 雍州府志 貞享刻 小川人家端

午所用木刀或謂菖蒲刀云又木長刀木甲由山伏

之頭巾袈裟并藥玉等物賣之云云 物傳 享保十 六七十年

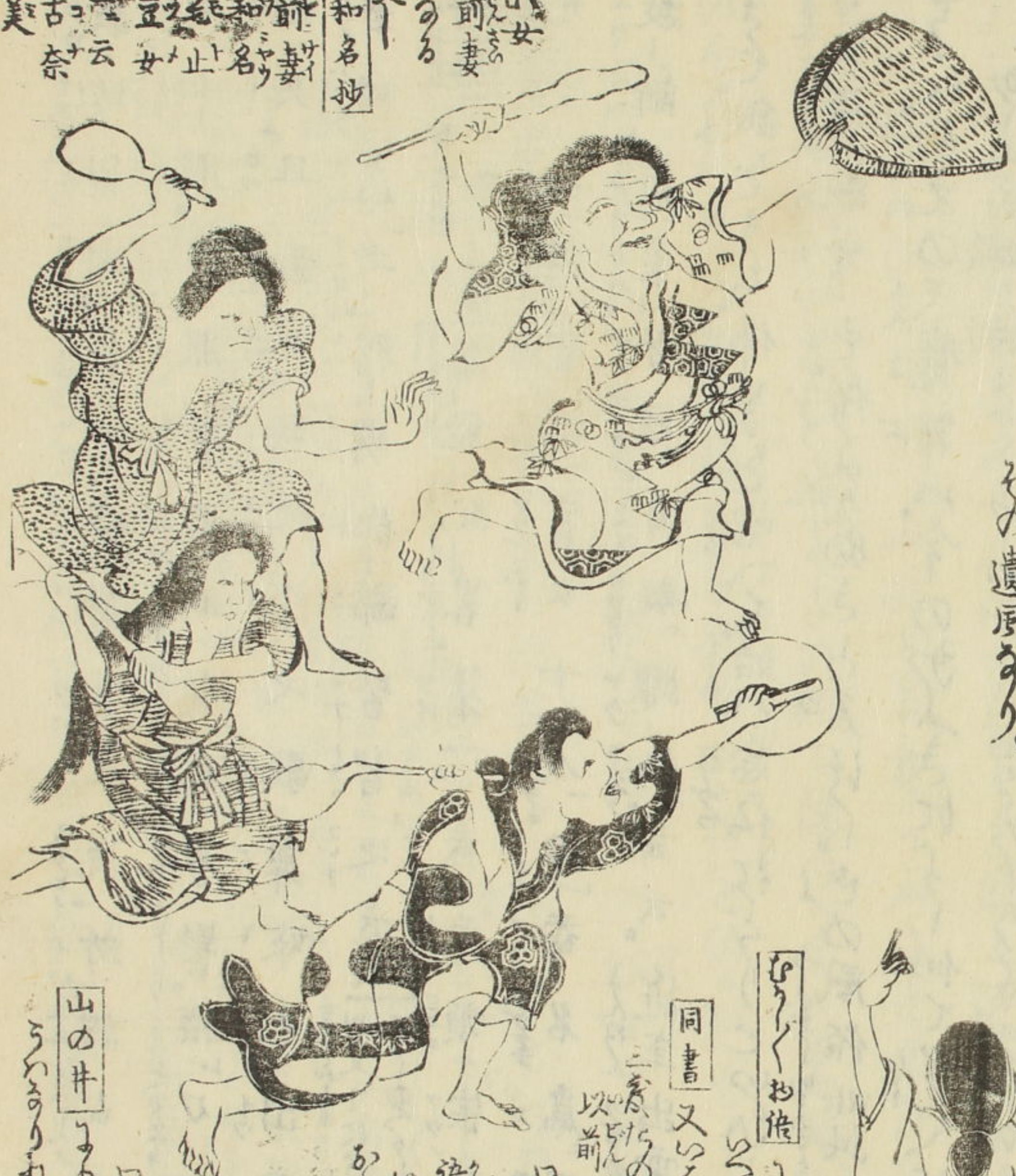
吹あまら五月の初ごきんごおけあら菖蒲刀をうりてありくそれを

子供求て五月四日小子供志あうぶよと巻しごきんをありたごきを

ゆも菖蒲刀をさしあらしを吹あり云云」とありそれらをえりすすよ

まて下古画よとありあり今とこれ小なる事なればおぼし

美古豆和餅
奈云女止名舞
和名妙
前妻
ある



カシと髪を
かづらひの
その遺風なり。



お供
又いそぐ
前八十歳をくりの老妻の世に
口をら若死をせんさうたす
打十六歳たのまれ出いあど
「と」のり。享保十八年
とるよりの年を考ふ
あは永禄元電めらあ
ありしひああん。

山の井
より自又の摺本れと若菜を打を
ういありたきたるもけ図はあり。

古の
後妻
打の
図

け女
後妻
あは
べし。
かしらよ
むとびた
あづのの
さゆと
あつらひ
能の女の
あは
上古の
あは



道加望一後千句
ろーと
あ
は
さ
は
地

○ういあり
えた
人の



成清縮真

胃董上編下之後六

○かろ髪をも倭装を著けり髪をりてふ。
 かにがねんぶつをとりての作あるべし。

○海名不記よ。
 ぬり髪よりれるあわの
 ごとみのをまこひ
 見障をこびよりけ
 云云。とりての符合を
 玉佩は似るあわの
 あれどもこみのを
 ちれよるありし
 あるべし。足袋のむら
 さりよりあれりえ
 板の巻よるむら
 さにびとれる。京童
 小早をとりての作
 会儀をとりての作
 とももとりての作
 ○こみ合儀をこびよ
 かりての男ぶにがま
 三十郎あるべし。
 ○あつちのこみ合儀
 たる符合をもと
 とい園の真あり。



○世に
 つけられし髪は
 つけられし髪は
 つけられし髪は

かかえあるべし。

○つん物の人男女ともに
 くらみののし。あつちを
 あつちのし。人目をあつち
 ぶ作べあるむら
 さるをとりての作
 びりの質直の
 風俗をとりての作
 たるべし。前もとりての作
 たりての作
 ぬり髪よりれるあわの
 質朴あり。

○は髪をりての作
 慶長年中より。今
 文化十年までかよを
 二百十餘年のし。の
 質素の風俗。目のま
 ようくして。つてにその
 せをとりての作
 といくはありた物をそありての作。

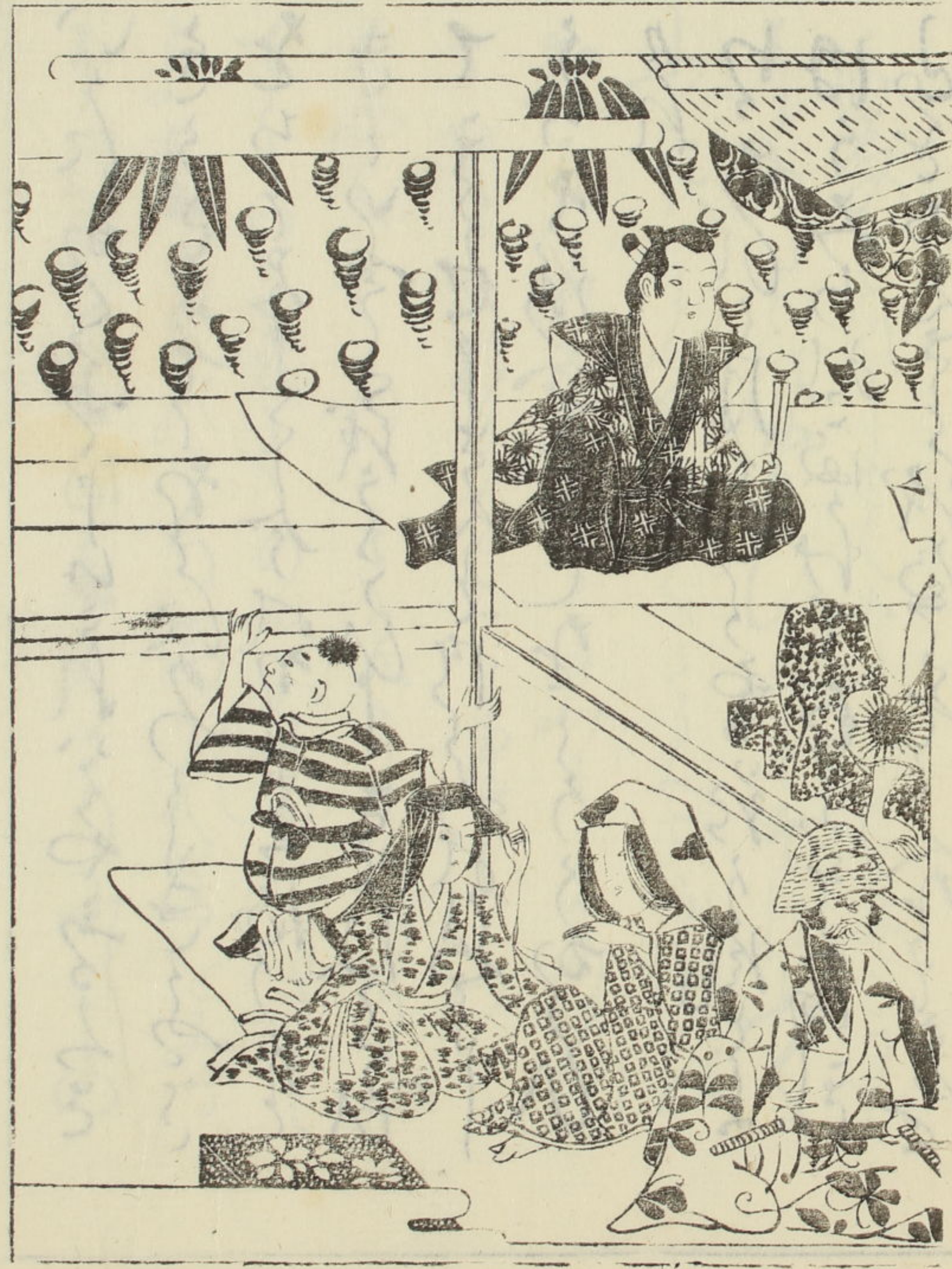


Figure 10

一條院の
后上東門
院

○酸醬を吹かす事 [七]

今の世は女童のわづきを吹かすはいとふき事 [栄花物語 八]

今川花の巻寛弘五年の所は「宮」の侍は後小たけりまふ云
たのほ乃侍年をもちむらと小をかりませどいとまうぞたけり侍
ゆりさうにあらむと心めとがたまむさうせ侍り云云 法及志らくら

あつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
とあり當時わづきを吹かすはいとふき事ありければこそあつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
しうへい宮中せんごしとまふらうりまふられをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
今文化十年まどがふらへ八百六年ありかゝる侍あつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
あつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

源氏物語 世分の巻まぐらうのまをいづるあつちづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
らうりて 髪のかくれるひゆくうらうらうち不也とありまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
榮花物語のまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

枕ノ草紙 異本小「たけきよとくうた物わづき」
ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

本草綱目

卷十 酸漿の條下 主治云「食之除熱 治黃病」
益心兒 附方云「酸漿實丸 治婦人胎熱難産」

益心兒

附方云「酸漿實丸 治婦人胎熱難産」

わづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

○小兒をあやひよバアといふこと [八]

古今著聞集

卷十 怪異部 ちげ物 又児をさうれたるをいふ條云

ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ
ありわづきまどをふたぬうめととえたらんやうみどふんえさせ

○比比丘女 [九]

今童むびよ子とらうくといふ事をせめりこれいと古に事と古に比比丘女と
いふその原は惠心僧都經文の意をとり地藏菩薩罪人をうづひえあふ
を獄卒取らうんとする件をまらるび地藏の法樂よせら進しう始れりと

○比比丘女圖

られ今のつよよもてほをくらふ子と
 とりかららねばびの原あり比丘比丘尼と
 りのそ音ほよてひふくめとらり前も
 いもらとく惠心院の傍都よりとまれり
 るれバりしとくうられりて

日本法華驗記 下の巻よ云
 僧都迨春秋七十六
 以寛仁元年六月十日
 寅時刻永遷化矣
 とありは昏の傍都の
 滅後りつらに二十
 五六年をまき
 長久中よ
 撰てる物なれば
 傳とさるにたれり
 續本朝往生傳 十一
 元亨釈教 卷四
 手丁
 にも僧都の
 傳を載く入滅
 の年月日ありひよ
 享年られにあらざり



冊黄上編 下之段十

寛仁元年より
 今文化十年まで
 八百七十九十七年と

○又鬼ワ〜とて、見を

〜とらるまねびとる
 びらねばびもびのあめめ
 一歳も年そのあまよ
 鬼といふ名のあるあらん

物類辞書 卷五よ云
 江戸よ鬼といふと云を
 東國及山愛理 肥の長崎
 よ鬼といふ云奥の仙臺
 びとあふくと云常陸よて
 鬼のまらと云といり

○のろ〜よとも月令廣義 五卷の
 折鬼戲ハ〜小い
 鏡魚あり 通雅 卷三の替鬼
 撰輿の目わりのたひよとてりよ
 鬼といふ名あり 和漢のひ似る
 事と



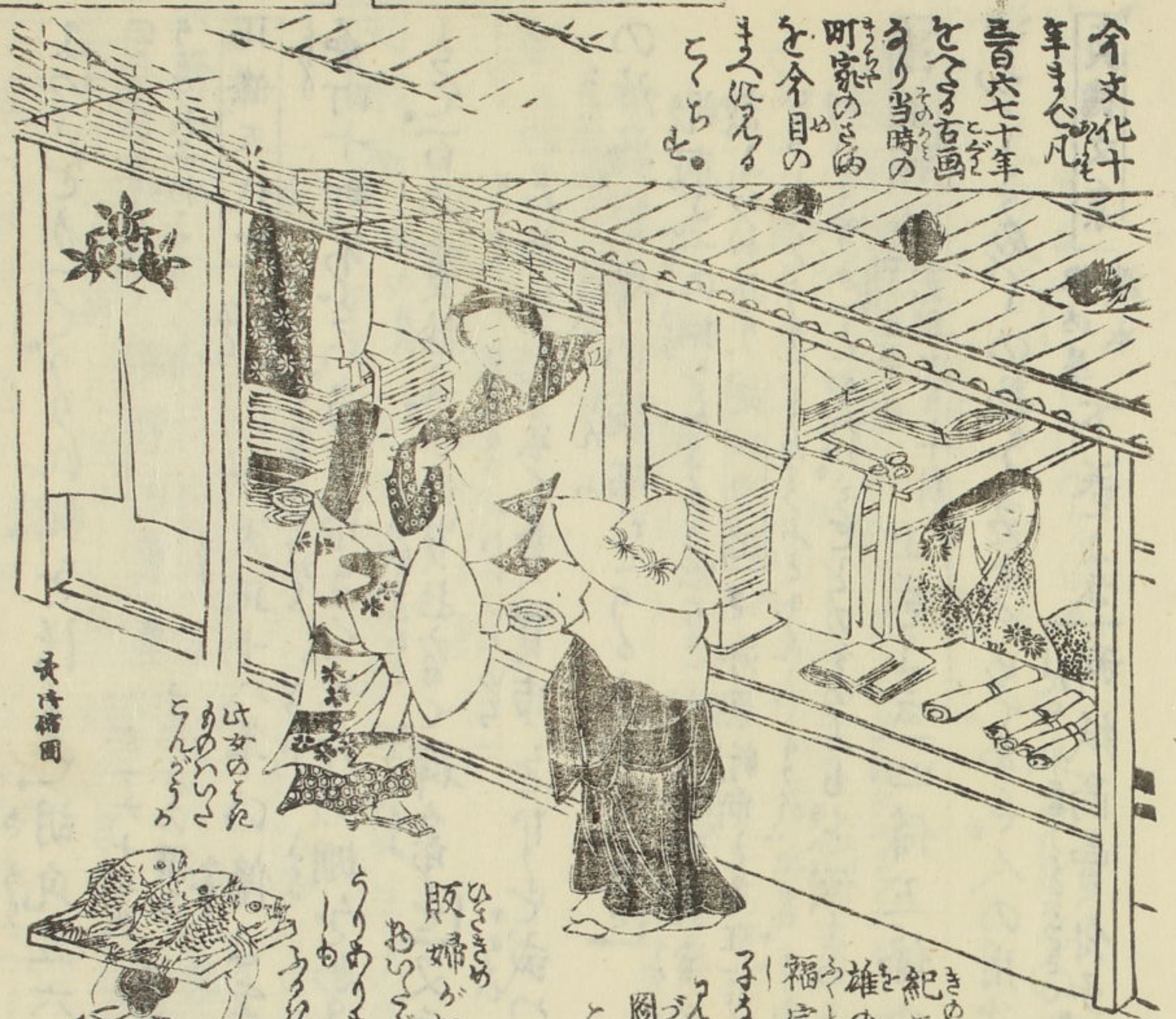
○これハ古画よあらざ
 三国傳記の文の
 ありきをもちん
 とて今あらた
 ぼ〜といたる圖あり

一柳青筆

福富の
草子の
えきま
の園も
のれん
三つた
ふきを
むけり

笠ねる
女のた
りの十
かん職
人足よ
ふん
板金剛

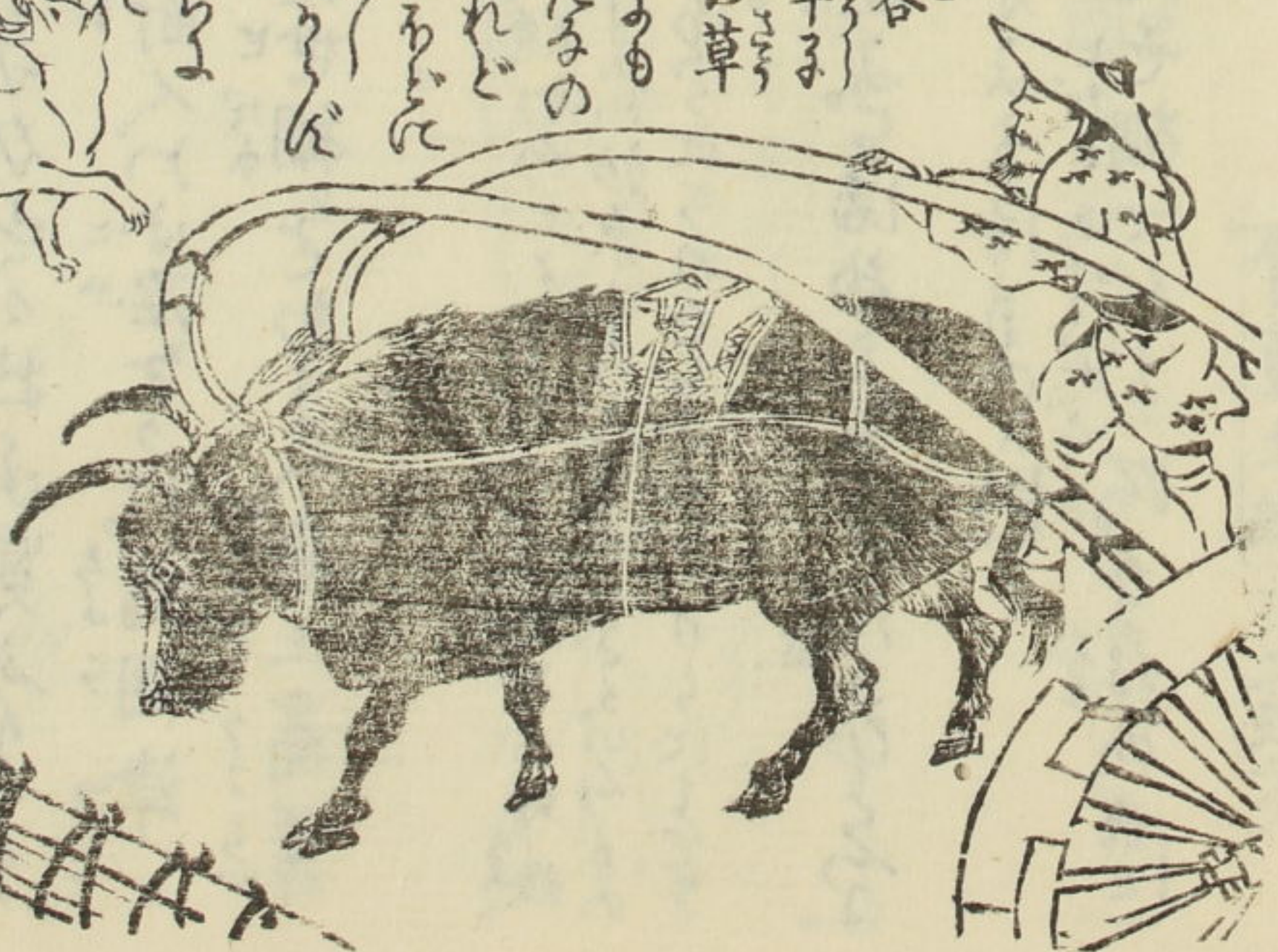
今文化十
年ま心凡
昔六十年
をる百画
うの当の
町家のとめ
を今目の
まへに
らと



天清橋園



販婦がめら

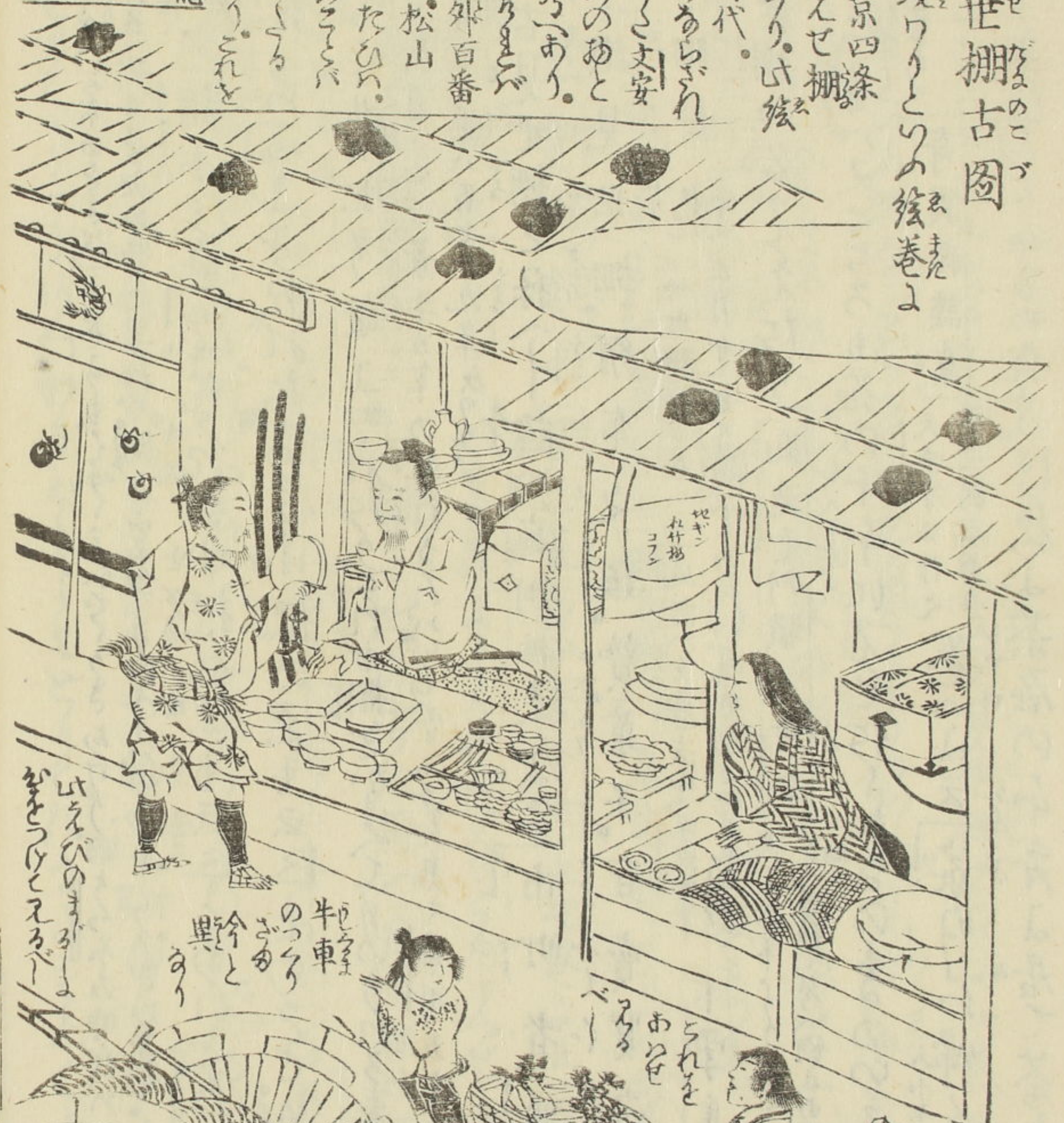


植園所藏

紀長谷
雄の草子
福富の草
子あまの
うまなまの
園めれ
これあ
らと

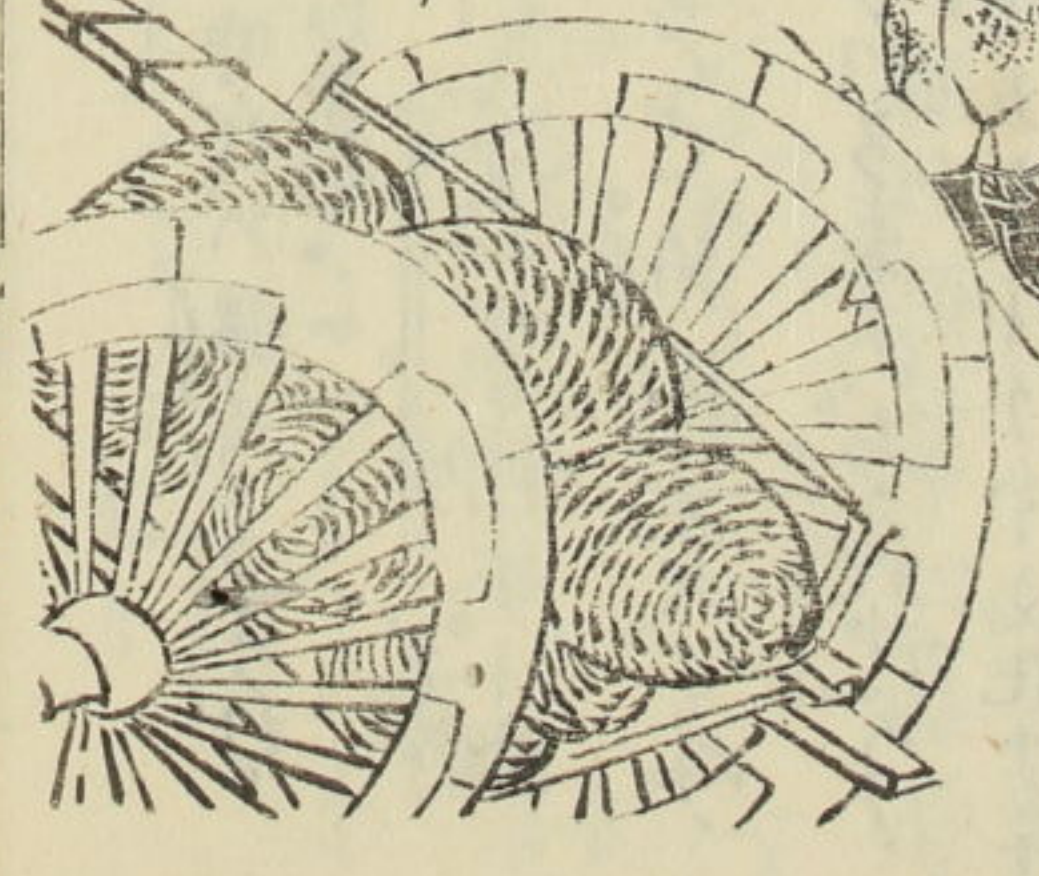
○見世棚古図

これ鏡ワリとりの後巻よ
戒る不京四條
の所のえせ棚
のさゆさり。は後
またの時代。
つまびらあられ
どもあわこ支安
宝徳のころのあと
ありの考あり。
こびるふりま
りらつ。外百番
のうらの松山
わらうたひひ。
此後巻のころに
がまに似
ところあこれ
支安宝徳
のあと
さひり
とひ。



いえびのまが
をさつてえら

牛車
のつ
さ
興冷と



いへの竹さ
のれるさあ
竹の
の巻よ

建長四年
より今文
化十年ま
で凡五百
六十二年
あり蓋滿
あり蓋滿
あり蓋滿
あり蓋滿

けしきちりたきく舟内侍

一〇三 髪のおやめいあはれとむしひあるかぶら
○案ずるふ建長四年の後海草院十年十の時時増々
なりしハ舟内侍少将内侍ありてそれらの女房たりふ蓋滿
させむひありて一〇先板の巻ふあはれありて此物あり
年のくを引つれど日記ふ建長四年より此物ありて一〇増々
年の文和四年よりあはれ百餘年さるあり。○増々ありの
先板の巻ふひけり。これに合せたり。

○板風呂・湯銭・風呂屋 三十三

今物語 小ある僧いささかお入し奉りてそり。その文と考す

小戸ある物とききゆ。此物語ハ信實頼臣 文治承久ののわかれし物也。比の人あり

風呂といふ名ハふるき奉りてそり。あはれありておありやせん

○日蓮御書録内 卷三四 條金吾小あはれし書ハ弟共ハ常ふ不

便の由有べし。常ふ湯銭さるるとのあはれしあんど有べし。太平記 卷三 延文五年乃

文永三年之當時より湯銭風呂ありて一〇あはれし。太平記 卷三 延文五年乃

骨董上編 下之後九七

所ハ今度の乱ハ併島山入道の所行也と落書あり。哥中も讀湯屋風

呂の女童部までもそてあはれけしき。これハ京都の奉りて。當時

如きもありしやうふまきゆ。

○提燈再考 三十四

朝野群載 卷四 應徳二年十月卅日 法定院佛聖供燈油料狀云云

置佛像之前無挑灯柱云云 挑灯とあるハ燈籠と云ふ也。下学集 蓋囊抄 等

挑灯の字派らる。蓋囊鈔 卷三 第八條 燈籠をアンドン。子ヤウチンと云文

字如何。答。挑灯と書て子ヤウチンとよそ。行灯をアンドンとよむ皆唐音

字如何。答。挑灯と書て子ヤウチンとよそ。行灯をアンドンとよむ皆唐音

唐話纂要 卷五 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈 挑燈

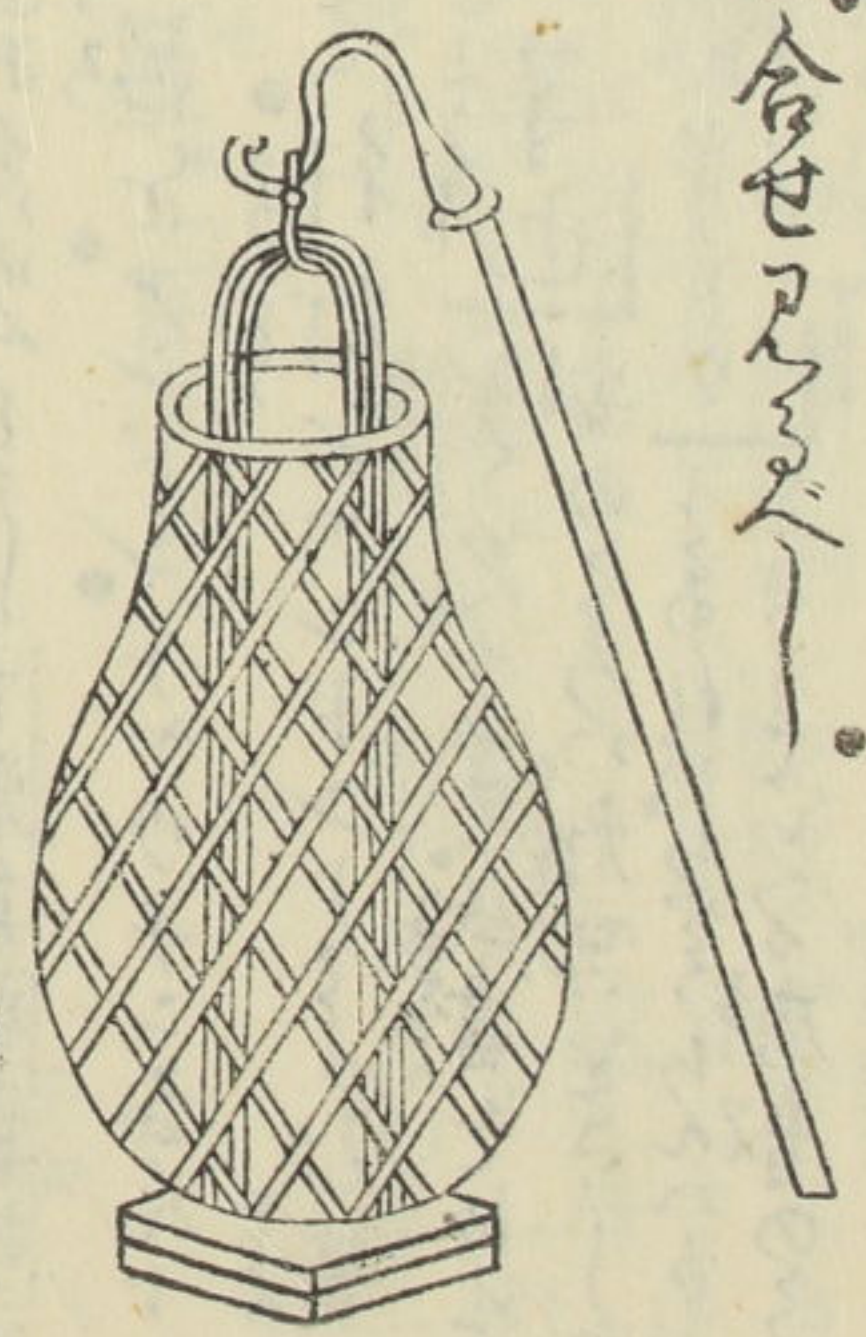
走衆故實 天文永祿のころ 日之れて清らるる唐音のころ

塵塚物語 天文廿 卷五 雷計事

先板の巻小唐土の
たむちちやうらん
ありとよれどなぞ
ふたむちやうらん
あり俚紙
縮をこぼる

とらるる所ふ「あらるる」などいれどもちやうらん鞠の勢ある火けりるびら
のまて外いそそび唯くきこゆ也とありこれハ籠ちやうらんハありて丸形乃
たむちやうらんハまもも天文の比たむちやう
らんもあり
先板の巻の提灯の條よ合せんべい

暇の玉圻三才圖會器用
十二の巻小所載提灯あり
先板の巻小いそる籠ちやう
らん、此唐制のこらるる
とらるるあそあそんべい



○行燈再考 二十五

行燈ハ提ありく為小制れる物也。家内ふさむあつ後の事と
證を又アソいそるる山伏道葬送行列次第杏花園 蔵本といふ古き書小上次
導師先達持檜次馬次捧物次左右行燈次棺云々無縁雙紙卷四尊
宿茶毘之次第といふ條ハ一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行

骨董上編 下之後廿八

群持云々

行燈ハ提ありきり
のこく提ありきり
累解脱物語 卷下ハハのむとより集りけんてんふ

行燈ハ提ありきり
元禄三年の御本也そのころまでも田舎あつ行燈とさけありきり
先板の巻小引る嵐雪がそめりく町の發句と同時ハ合せ考へべい

○まよしたまのちやうらん乃再考 三十六

先板の巻小秋の夜長物語を引てまよしたまのちやうらんといふ魚鱗乃
誤めて綾とそりける挑灯あんとといひハあてれひぐとそりき古印
本ハまよしたまのちやうらんと假名おわけと後小古写本とそればハ魚鱗の
燈炉とありこれたしある證あり燈炉とありてハ挑灯の證ハあつて
とのまよしたまのちやうらんといひハ挑灯と燈炉ハひと物なれば古印
本ハまよしたまのちやうらんとありも後のさうらあつてハまよしたまのちやうらん
燈とそりてハ唐国の魚鮎灯の事ハ明の田汝成西湖志餘卷下燈市

明月記
嘉祿三年
十一月十
九日の
條に
手鞠を
連歌の
おひあふ
せられ
たり

とてあはれおつ—ませば、そのあはれおひあふ、
 拾政屋、えいごうまの—後、はひる、あつひたまで、女房乃あつよ
 まじり、はくらんご、貝おひて、まじり、へんご、あつひた、の事どもとおひひく
 む—はく、日とく—後、はく、はく、
 二小云 禪 鞞とて坐 禪の時 眠とさまさんぐたり、小頂よおく、手鞠のやう
 ある 物と 又卷八小云 或人の女腹中、小大ある、手鞠のちどほて、石の如く堅
 物有云く 太平記 卷廿三の 空より 毬の如ある 物光て 叢の中へぞ落る
 ける 流布の印本の訓、おひあふ、ちどほ、まじり、太平記音義の
 消息小云 手鞠、鞞打、是可被、張行也 遊学往来 卷上 正月の童遊、ハの名
 目小 少性之、拵云、指、楽也、拍、毬、石子云く、これらも、正朝とて、尺素往来、文明の
 小云 面々、偶、合、合、之、次、圍、其、將、其、雙、六、下、始、揚、弓、手、鞠、亦、終、目、て、張、
 行中、
 あり、
 あり、

骨董上編 下之後世

手鞠

○これハ文祿慶長のころに繪ある—
 時代の考へ別あり、む—ハ、か、の、こ、こ、こ、
 手鞠とほ、に、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 手鞠の、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
 手鞠の、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、



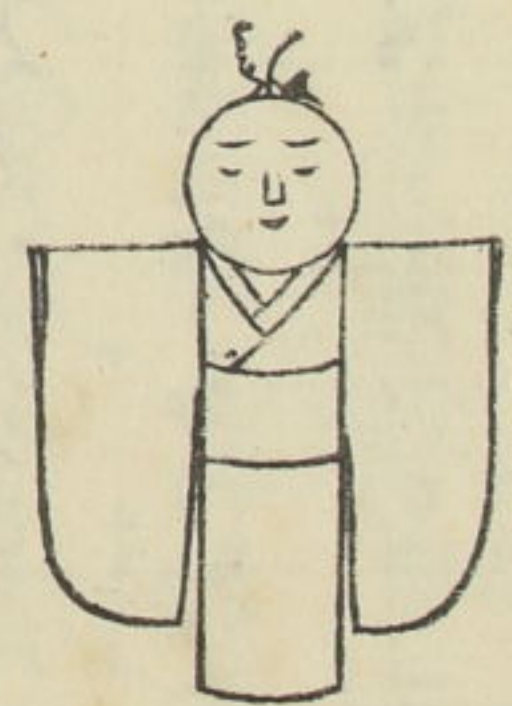
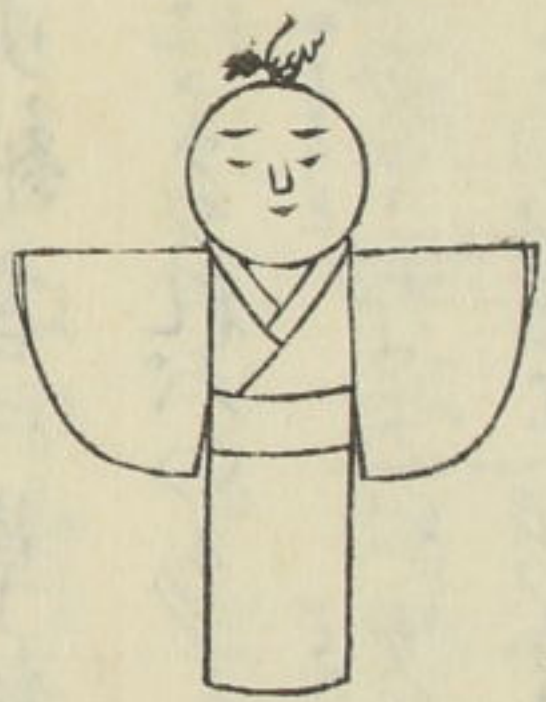
當時の画、
 慶安二年の印本
 尤之双紙 上巻、小、ま、ま、ま、ま、
 手鞠、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、

たろあのからなまきと。つみくしの質素のあざうり紙をまきりのあねばい。こころ考をこころで
あまのせの。龍の條は合せるるべし。

攝陽郡談 卷十六ゆゑ「姫此」

住吉郡。遠里小野の田圃の作り
所は市店小出を。多ハ堺道よ
あり。大さ鷲の卵のごとく。色
きりあて白く。ゆとりて人の面を
画かきそ。幼童の顔と久あひだ
黄色あまもあり。黄く白くもふ
美麗。とくれて艶き。形と
以て号し。とつり。此書ハ
元禄十四年印行せり。

○九月九日髪葛子圖



○八月朔日姫氏雛圖

ひめこころのひめをひめてあまひ
る。龍の龍のひめをひめてあまひ
引の。せれば。筆のほのぞに
こころ筆。

○桑名こころあてハ
ひめあ草を
かづ草と
ひやとぞ



伊勢桑名

公羽麻呂寫真

骨董上編 下之後卅五

○花むすびの考 ○唐土の鞆子ハ此の羽子れ子ふ似たる事 ○魚ととつとつ再考

○きりこ灯籠の考 ○獨樂の考同古圖くまぐ ○梓現寄絃口寄の考同

古圖 ○編笠の考古圖くまぐ ○端午れなごり花五月まのこの考同古圖

○宗任が梅花の哥の考 ○朝夷名が鶴の紋の考 ○鱗の考 ○編木摺門説

經の考同古圖 ○放下僧くまぐりこあやあごあや竹の考同古圖 ○千駄櫃

の商人の古圖 ○せんと物賣の考同古圖 ○茶笥髪三里紙の考 ○女の髪

の風古圖くまぐ ○そんと物并ふ文字入の文様の考古圖くまぐ ○目黒の

ゆら花の再考 ○いゝをりくまぐ ○棚機の牛馬 ○尻おひ比丘尼 ○踊

の古圖くまぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓れ古圖 ○皿屋敷の考 ○手管

いゝ詞のりこ ○枕久塚の考 同清水録の圖 ○祇園梶女の肖像 ○友禪漆の

考 此外あまこあれどもくまぐ

追加 望一千句辨法 辨法をひくやぬりぬけおろしとての前句は 望は五尼のしとての徳妻とては
 なり。これれももういなり打の一律とてと。 誹諧家譜とてとてふ杉田分当望一八寛永七年六月二
 没せり。行年八十三なり。きこぬふまふて六天文十九年の生れにいまういなり打のたをて時多う。此
 ういなり打は 怨妻のこことたせり。白い。きこぬふまふて六天文十九年の生れにいまういなり打のたをて時多う。此
 徳元が著せり。 誹諧初学抄 巻の初ふりなり。打をいせり。 誹諧家譜 在哥坐 仙臺比五尼 坂のふ丸
 ひくに坂後ともわけり。時鳥 松山 玖世とあり。これびんごの縁とていふ。 望一八寛文五年の撰
 Omitaと龍のそれくの条ふ合せん。

江戸 醒齋老人著 京傳

備書 島岡長盈
 同 凡例目六下之巻末自
 卅四紙至卅六紙 藍庭林信
 刷人 名古屋治平
 朝倉吉次郎

加減朱子讀書丸

一包 一巻五合 一五五合
 ●氣んとはよくおわがえとよく心腎のきんを
 ●生れつきとて多病の用てり ●老若男女ふまふて
 ●玉石銅印古体述作ゆゑふ應を ●らふ石上刻一字
 ●秋次刻一字朱文七白文五合大印八此限よわ

京山人百樹 骨董上編 下之後世六

和漢圖書出版發行所

發行兼 印刷者 東京市京橋區南傳馬町二丁目 藤井利八
 東京市京橋區南傳馬町二丁目 松山堂書店

